ちょうどそのころ、兄が製材所で働いていたので、私もその事業所で製材工として勤める。三年くらいしてから木材業を自営したが、資金難のため廃業して、県内大手の建築会社へ入社し、木材担当や、営業関係に携わり、最終的には取締役になり、二十六年間勤務して退社した。

現在は、長男夫婦と同居しながら、細々ながら家内と共に健康で生活している。目下の楽しみと言えば、中支戦線で生死を共にした戦友、そしてシベリアで飢えと寒さと重労働に耐えた同志と、年一回戦友会で苦難の昔話をすることである。

シベリア抑留記

福島県　壁巣一弥

出生から入隊

大正十二年九月四日、旧田村郡中妻村大字西方字後作一五三番地、壁巣家の長男に生まれる。高等小学校卒業後、学校法人安積学館へ入学、同校を卒業する。家業の農業に従事、食糧増産に励む、傍ら青年学校に入校、軍事訓練など学ぶ。

昭和十八年に徴兵検査を受け甲種合格となり、昭和十九年三月、東満綏芬河の満州第二国境守備隊第二中隊に入隊する。六カ月の初年兵教育終了後、部隊内で集合教育を二カ月、同年十二月、旅順の下士官候捕者教育隊に入隊する。前期三カ月は歩兵重機関銃の一般教育、後期三カ月は専ら挺身奇襲攻撃の訓練演習であった。

日露戦争の激戦地二〇三高地なども演習地であったが、ロシア軍が構築した要塞の堅固さに驚いたものであった。

ソ連侵攻前後、終戦、シベリア抑留地への旅

昭和二十年五月、教育隊の教育終了。東満城子溝で新設された第百二十八師団挺身大隊に転属になる。その後、老黒山に移り、日夜挺身奇襲の訓練演習に励む。昭和二十年八月九日早朝、突如ソ連軍の侵攻により、部隊は予定陣地に向かい老黒山を出発、間島省頭道溝

付近においてソ軍機の襲撃を受ける。そのため急ぎ小隊ごとに山中に入り、八月十一日陣地分散配置。

八月十五日夜、ソ軍戦車に奇襲攻撃を実施、戦車二台を擱座させる。その後、大隊本部及び中隊との連絡が途絶したため小隊独自の行動をとり羅子溝へ進出、小戦闘を繰り返しながら幾多の山々を突破。九月二十五日、敦化北方官地において武装解除、敦化に収容された。この間、九月上旬、羅子溝西方の部落で部落民より終戦の情報入るも、四囲がソ軍なので情報を信ずることができず、全員西進を希望、山中行動を継続した。

収容所敦化の飛行場は、日本軍の幕舎で埋まっていた。終戦と同時に戦わずして武装解除をされ収容された者と、二カ月近く食うや食わずの山中行動をした我々とでは、王様と乞食の差があり、今でも忘れられない。

また、官地より敦化までの行進中、ソ連兵に時計、万年筆など全部取られてしまう。子供のような若い兵、汚れた服と山猿のような顔を思い出す。

十月中旬「東京ダモイ」を夢に見て敦化収容所を出発。一週間をかけて牡丹江省掖河(えきか)まで二八〇キロの道程を歩く。与えられる食糧は無いに等しいが、日本に帰れるという一念で霜深い野営、空腹と闘いながら連日歩いた。

十一月上旬、有蓋貨車にすし詰めで掖河を出発する。いよいよ帰れるか？　ソ連兵は「ヤポンスキーソルダート、東京ダモイ」と口々に言う。寒さと空腹にふるえながら綏芬河を経由して、十八日間の汽車の旅、途中東進から北進、そして西進に変わった時の動揺、落胆、絶望的な姿が忘れられない。

抑留地の生活

下車、そして行軍。それにしてもひどい寒さだ。疲労困憊。着いた所はバム鉄道の西の起点タイセットより九〇キロほど奥のバラック造りの収容所。虱と労働はあるが食物少々、電気なしの生活。空腹と寒さに苦しみながら鉄道建設作業の毎日。酷寒のころには毎日数人の死者が出る。一人から五人、十人と、最後には一穴に数十人一緒に埋葬。なんとか生きている者も栄養失調と重労働が重なり、みんなフラフラの状態。こ

れが本当の生き地獄かと思う。一年間くらいで奥地の収容所へと移動を繰り返す。

二十二年後半ごろより食糧事情も若干好転、そのころより民主運動始まる。若い元気な者が盛り上がり、年配の者は沈みがちの状態が続く。そのころ内地の家族より便りが届く。いつの日にか帰れるぞと希望が湧く。

帰還並びに帰国後の生活

昭和二十三年八月収容所発、一路ナホトカへ。車中、行きは地獄、帰りは極楽の心境。ナホトカ一週間の滞在にて乗船。これで生還確実と感無量。船中、民主運動の激烈を極めるも無事九月二十五日、舞鶴上陸。

九月二十九日、懐かしの生家にたどり着く。

復員以来五十年近い生活の中で、幸い健康に恵まれ、難事に出会えばシベリアを偲んで奮起し、東満の山野に、またシベリアの凍土に寂しく眠る戦友のご冥福を念じて、今日も生きている。

抑留の思い出

千葉県　内山留吉

本籍地は、千葉市千葉寺町。習志野戦車学校第三連隊に昭和十六年一月入隊。

昭和十六年十一月、満州公主嶺戦車学校第五八三部隊に転属。十八年、部隊全員四平街へ移動。

昭和二十年八月終戦。武装解除。

二十年十一月、ソ連に連行され黒龍江より船で出発、ウラジオストックに入港上陸、貨物列車にて約十五日間の旅でイルクーツクに到着。既にハルビンより先着していた機甲部隊と合流し、約二十人一緒に収容された。

伐採、煉瓦工場で約一年間労働し、第一〇収容所に移動。収容人員一千人ぐらい。

作業は製材工場、運動場整地等。この作業場で約三年間労働した。